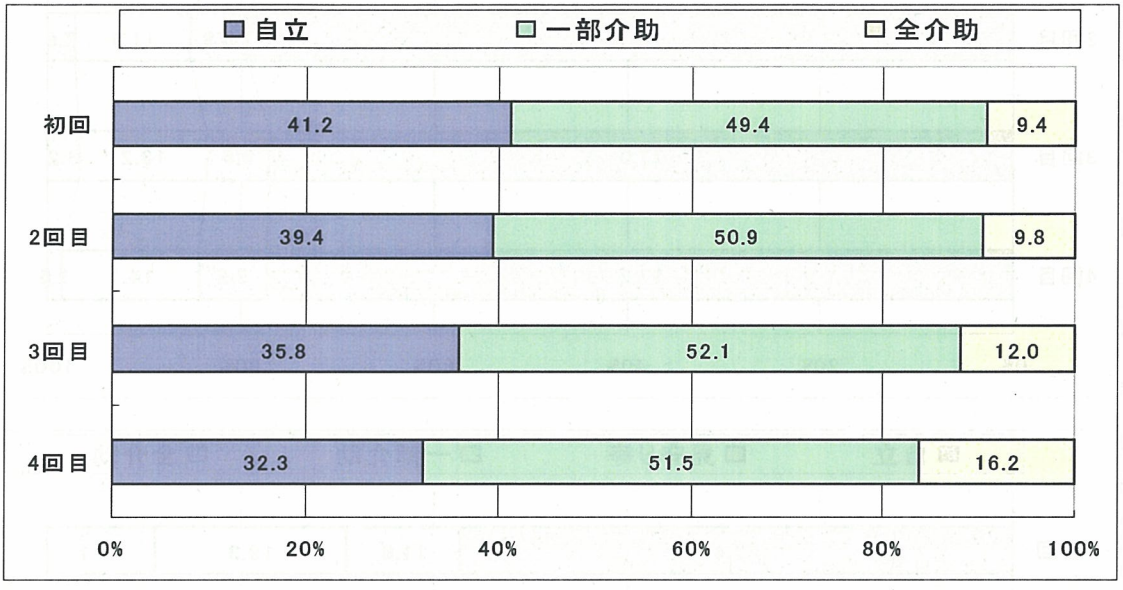
（58.7 %）で、「一部介助」が 2,618 名（39.7 %）で、「全介助」が 105 名（1.6 %）であった。

全体の傾向としては、介助割合は初回から４回目にかけて増加していたが、予防有用型群は、初回から２回目にかけて介助割合は減少していた。２回目から４回目にかけても全介助の割合は減少し、介助割合の増加は、全体に比較すると少なかった。



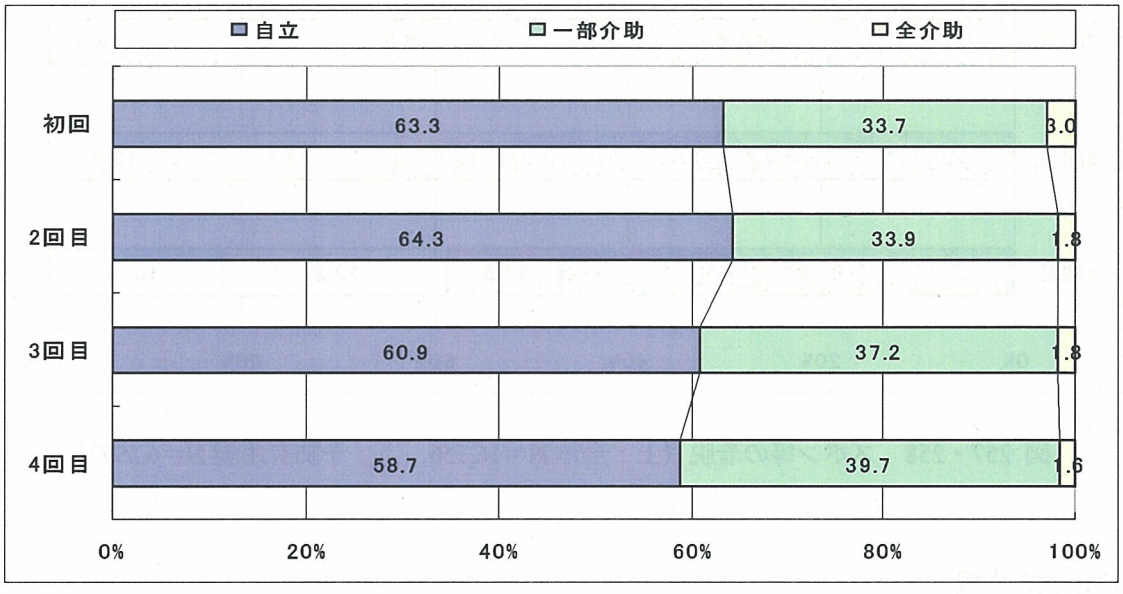
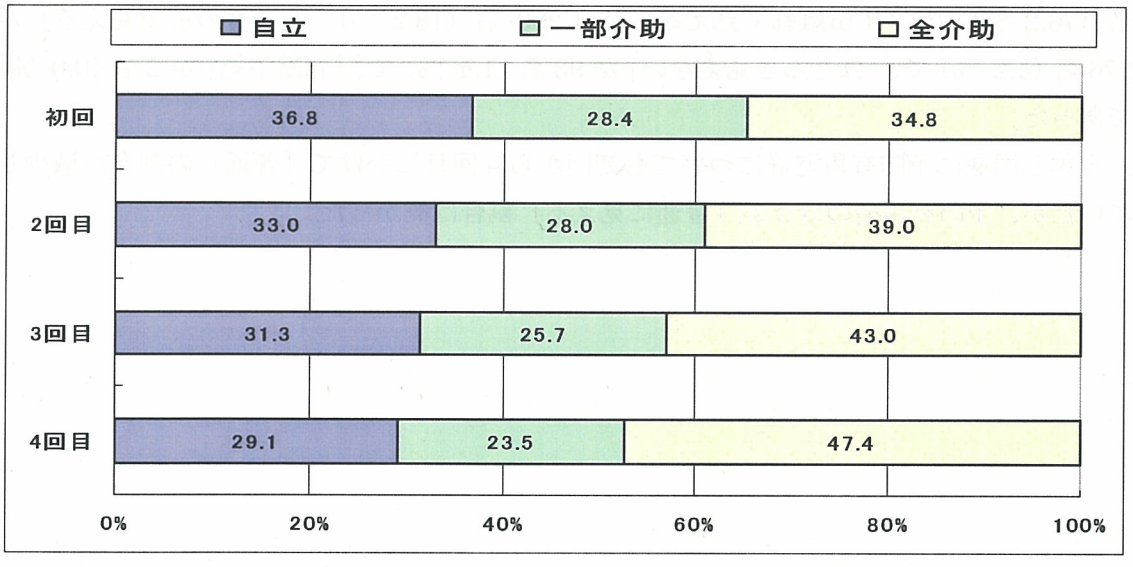


図 259・260　薬の内服（上：全体N＝16,156，下：予防有用型N＝6,597）

(31) 金銭の管理

予防有用型では、金銭の管理について、初回は、「自立」が 3,685 名（55.9 %）で、「一部介助」が 1,851 名（28.1 %）で、「全介助」が 1,061 名（16.1 %）であった。2 回目は、「自立」が 3,500 名（53.1 %）で、「一部介助」が 1,980 名（30.0 %）で、「全介助」が 1,117 名（16.9 %）であった。3 回目は、「自立」が 3,422 名（51.9 %）で、「一部介助」が 1,973 名（29.9 %）で、「全介助」が 1,202 名（18.2 %）であった。4 回目は、「自立」が 3,370 名（51.1 %）で、「一部介助」が 1,954 名（29.6 %）で、「全介助」が 1,273 名（19.3 %）であった。

全体の傾向と比較して、予防有用型群についても初回から 4 回目にかけて、介助割合は増加するが、その増加割合は、予防有用型においては、少なかった。



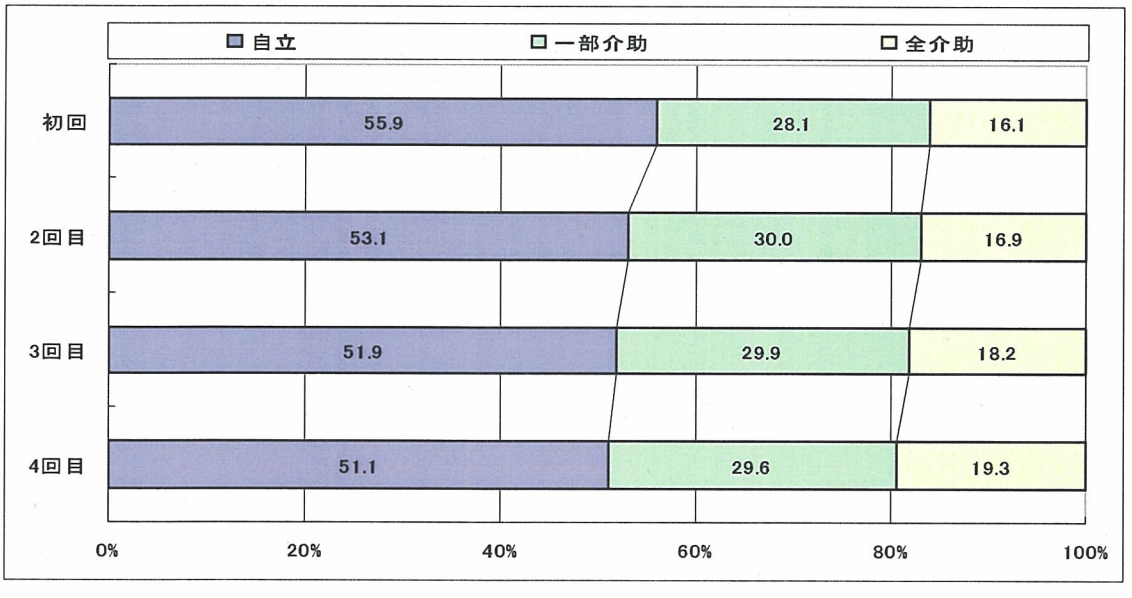
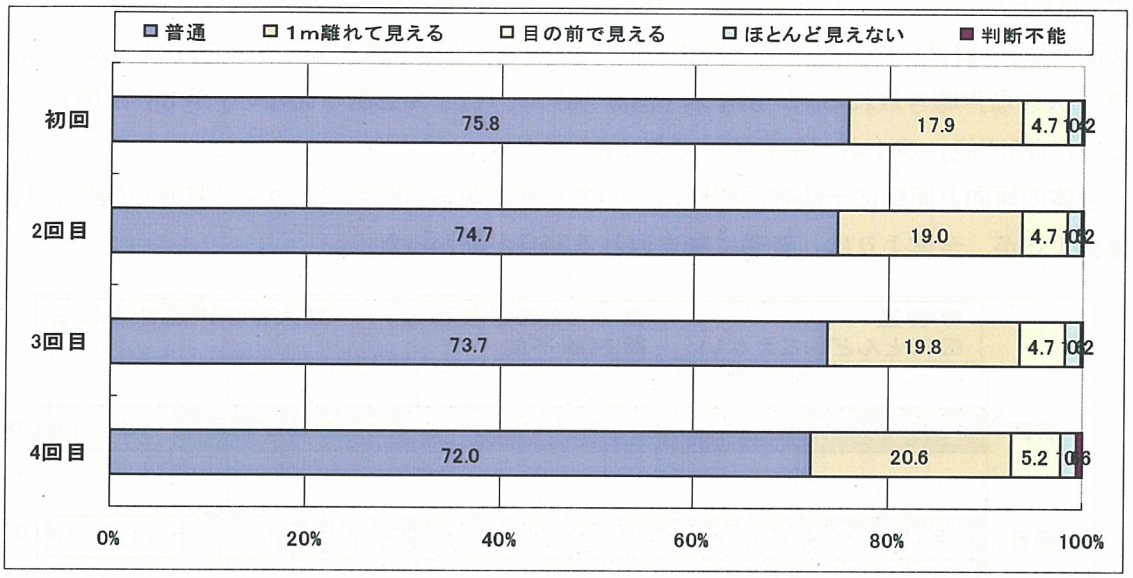


図 261・262　金銭の管理（上：全体N＝16,156，下：予防有用型N＝6,597）

(32) 視力

予防有用型では、視力は、初回は、「普通」が 5,160 名（78.2 %）で、「1 m離れて見える」が 1,076 名（16.3 %）で、「目の前で見える」が 267 名（4.0 %）で、「ほとんど見えない」が 92 名（1.4 %）で、「判断不能」が 2 名（0.0 %）であった。2 回目は、「普通」が 5,111 名（77.5 %）で、「1 m離れて見える」が 1,112 名（16.9 %）で、「目の前で見える」が 277 名（4.2 %）で、「ほとんど見えない」が 97 名（1.5 %）で、「判断不能」が 0 名（0.0 %）であった。3 回目は、「普通」が 5,080 名（77.0 %）で、「1 m離れて見える」が 1,170 名（17.7 %）で、「目の前で見える」が 255 名（3.9 %）で、「ほとんど見えない」が 91 名（1.4 %）で、「判断不能」が 1 名（0.0 %）であった。4 回目は、「普通」が 5,026 名（76.2 %）で、「1 m離れて見える」が 1,200 名（18.2 %）で、「目の前で見える」が 276 名（4.2 %）で、「ほとんど見えない」が 93 名（1.4 %）で、「判断不能」が 2 名（0.0 %）であった。

全体と同様に予防有用型群についても初回から 4 回目にかけて「普通」の割合が減少していたが、予防有用型のほうが「普通に見える」割合は高かった。



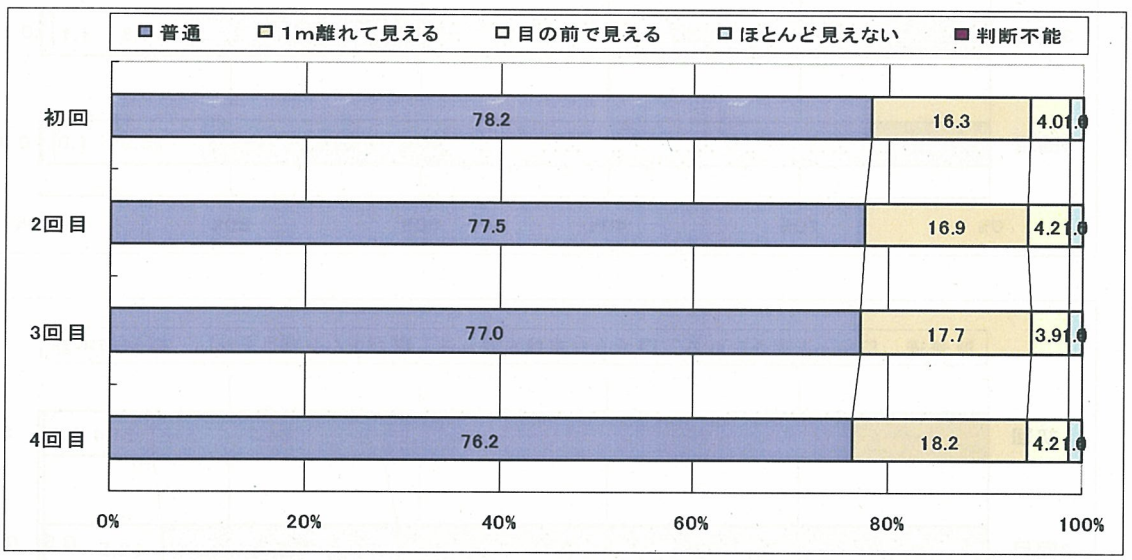


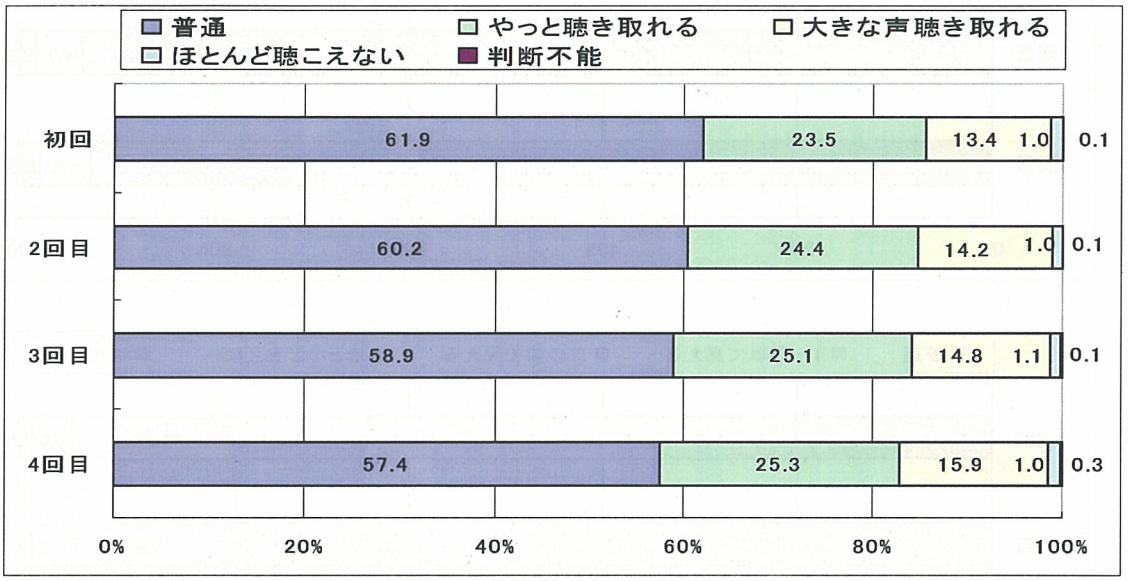
図 263・264　視力（上：全体N=16,156，下：予防有用型N=6,597）

(33) 聴力

予防有用型では、聴力は、初回は、「普通」が 4,211 名（63.8 %）で、「やっと聴き取れる」が 1,595 名（24.2 %）で、「大きな声聴き取れる」が 749 名（11.4 %）で、「ほとんど聴こえない」が 40 名（0.6 %）で、「判断不能」が 2 名（0.0 %）であった。2 回目は、「普通」が 4,109 名（62.3 %）で、「やっと聴き取れる」が 1,631 名（24.7 %）で、「大きな声聴き取れる」が 822 名（12.5 %）で、「ほとんど聴こえない」が 34 名（0.5 %）で、「判断不能」が 1 名（0.0 %）であった。3 回目は、「普通」が 3,974 名（60.2 %）で、「や

っと聴き取れる」が 1,735 名（26.3 %）で、「大きな声聴き取れる」が 847 名（12.8 %）で、「ほとんど聴こえない」が 41 名（0.6 %）で、「判断不能」が 0 名（0.0 %）であった。４回目は、「普通」が 3,883 名（58.9 %）で、「やっと聴き取れる」が 1,761 名（26.7 %）で、「大きな声聴き取れる」が 914 名（13.9 %）で、「ほとんど聴こえない」が 38 名（0.6 %）で、「判断不能」が 1 名（0.0 %）であった。

全体の傾向と同様に予防有用型群についても初回から４回目にかけて「普通」の割合は、減少するが、全体よりは、普通に聞き取れる割合が高かった。



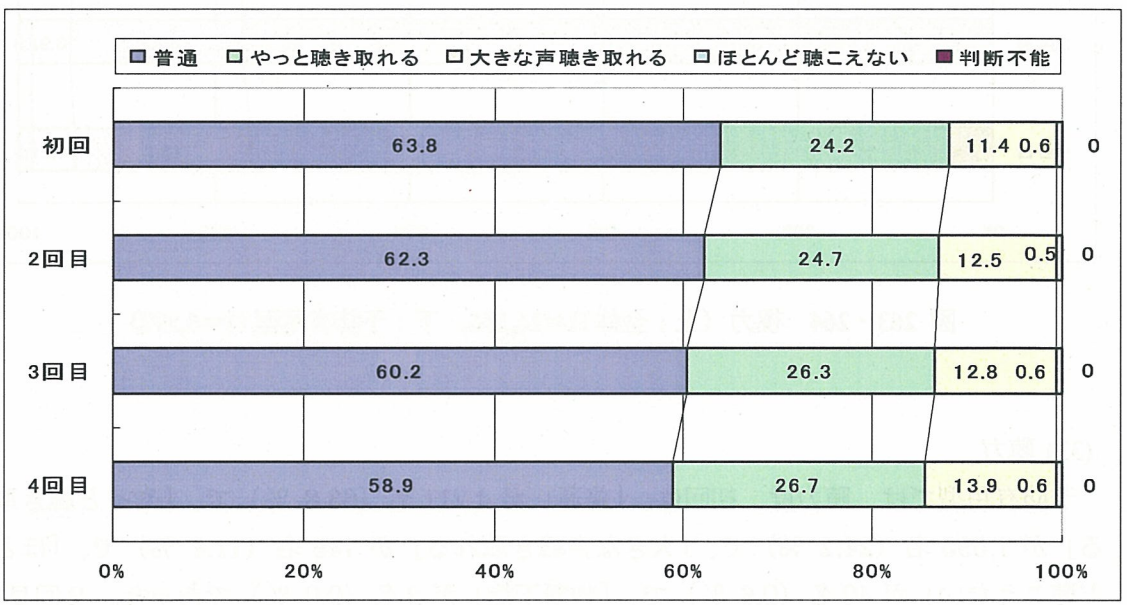
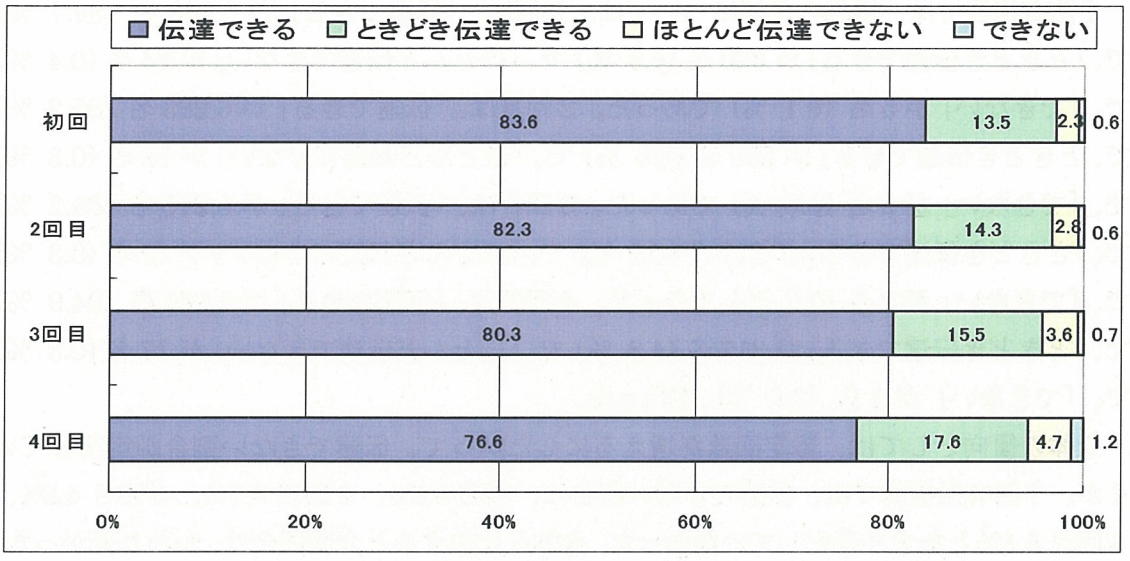


図 265・266　聴力（上：全体N＝16,156，下：予防有用型N＝6,597）

(34) 意思の伝達

予防有用型では、意思の伝達については、初回は、「伝達できる」が6,248名（94.7 %）で、「ときどき伝達できる」が320名（4.9 %）で、「ほとんど伝達できない」が24名（0.4 %）で、「できない」が5名（0.1 %）であった。2回目は、「伝達できる」が6,283名（95.2 %）で、ときどき伝達できる」が294名（4.5 %）で、「ほとんど伝達できない」が18名（0.3 %）で、「できない」が2名（0.0 %）であった。3回目は、「伝達できる」が6,278名（95.2 %）で、「ときどき伝達できる」が296名（4.5 %）で、「ほとんど伝達できない」が20名（0.3 %）で、「できない」が3名（0.0 %）であった。4回目は、「伝達できる」が6,261名（94.9 %）で、「ときどき伝達できる」が317名（4.8 %）で、「ほとんど伝達できない」が17名（0.3 %）で、「できない」が2名（0.0 %）であった。

全体の傾向としては、認定回数が増えるにしたがって、伝達できない割合が増加していくが、予防有用型群では、伝達できない割合は、初回5.3%、2回目4.7%、3回目4.8%、4回目5.1%とあまり変化していなかった。全体と比較すると介助割合は、かなり低かった。



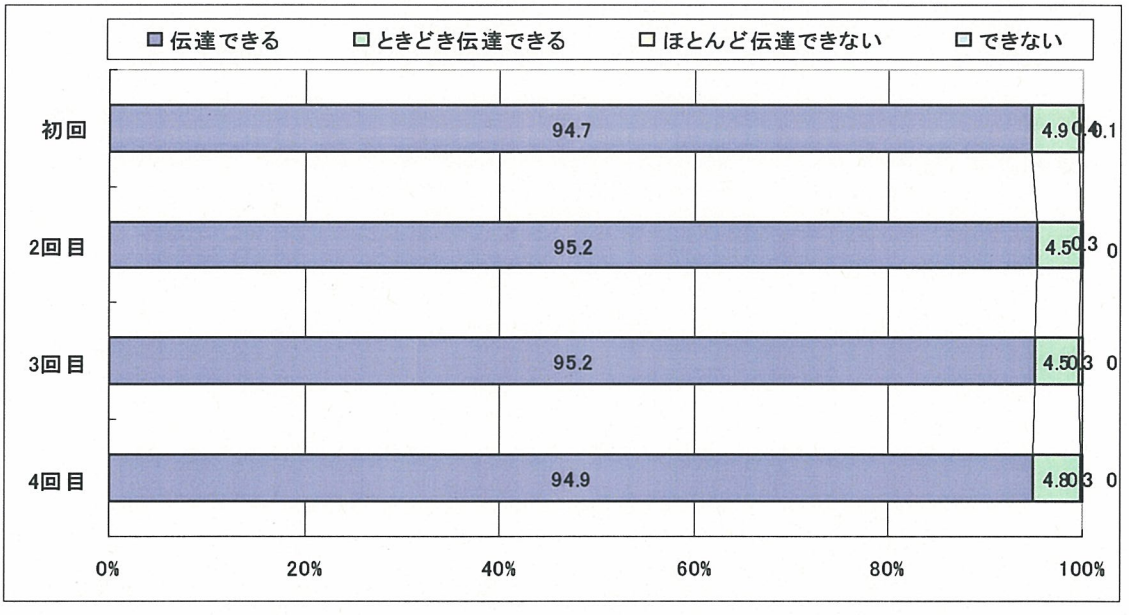


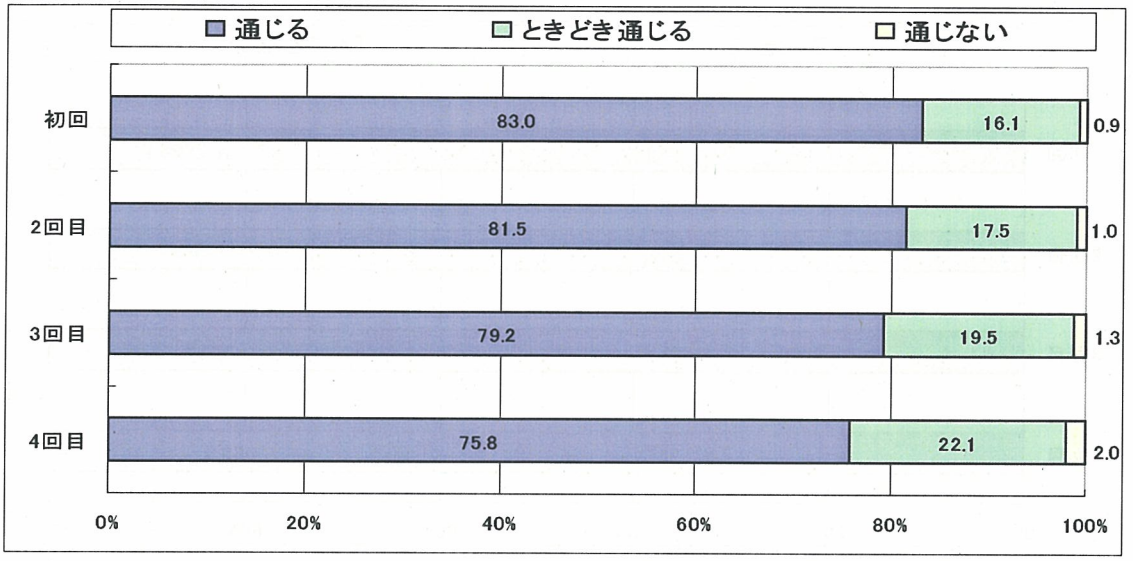
図 267・268　意思の伝達（上：全体N＝16,156，下：予防有用型N＝6,597）

(35) 指示への反応

予防有用型では、指示への反応については、初回は、「通じる」が 6,288 名（95.3 %）で、「ときどき通じる」が 306 名（4.6 %）で、「通じない」が 3 名（0.0 %）であった。2 回目は、「通じる」が 6,279 名（95.2 %）で、「ときどき通じる」が 315 名（4.8 %）で、「通じない」が 3 名（0.0 %）であった。3 回目は、「通じる」が 6,258 名（94.9 %）で、「ときどき通じる」が 338 名（5.1 %）で、「通じない」が 1 名（0.0 %）であった。4 回目は、「通じる」が 6,246 名（94.7 %）で、「ときどき通じる」が 350 名（5.3 %）で、「通じな

い」が１名（0.0 %）であった。

全体の傾向としては、指示が通じる割合が、初回から４回と徐々に減少していたが、予防有用型群においては、減少してはいるものの、その変化は、初回が 95.3%、２回目が 95.2%、３回目が 94.9%、４回目が 94.7%とほとんどなかった。通じないものは初回から４回目まで０だった。



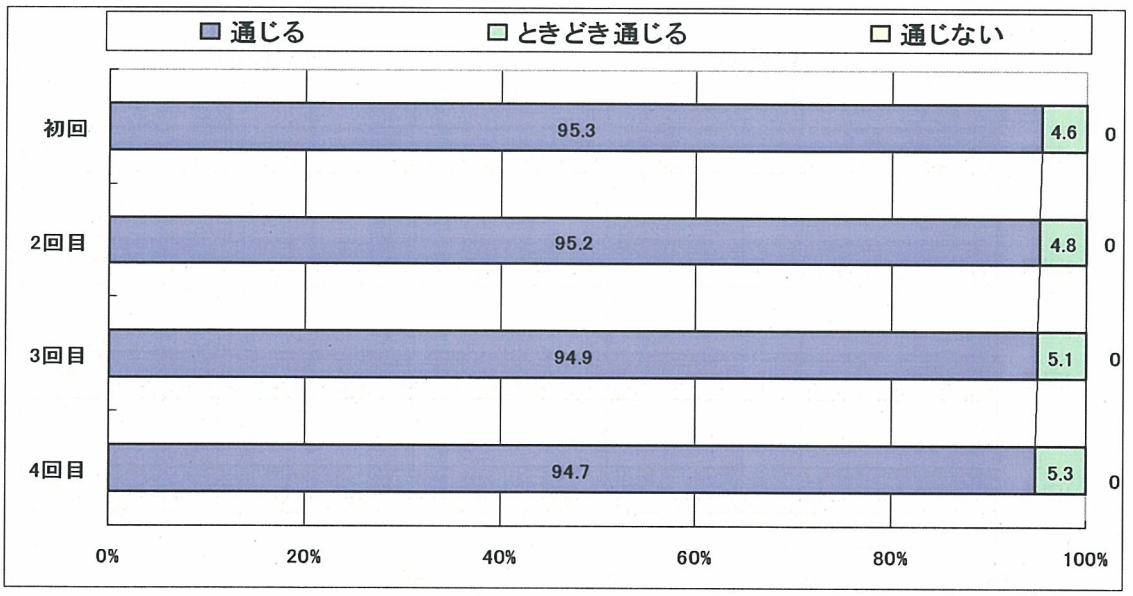


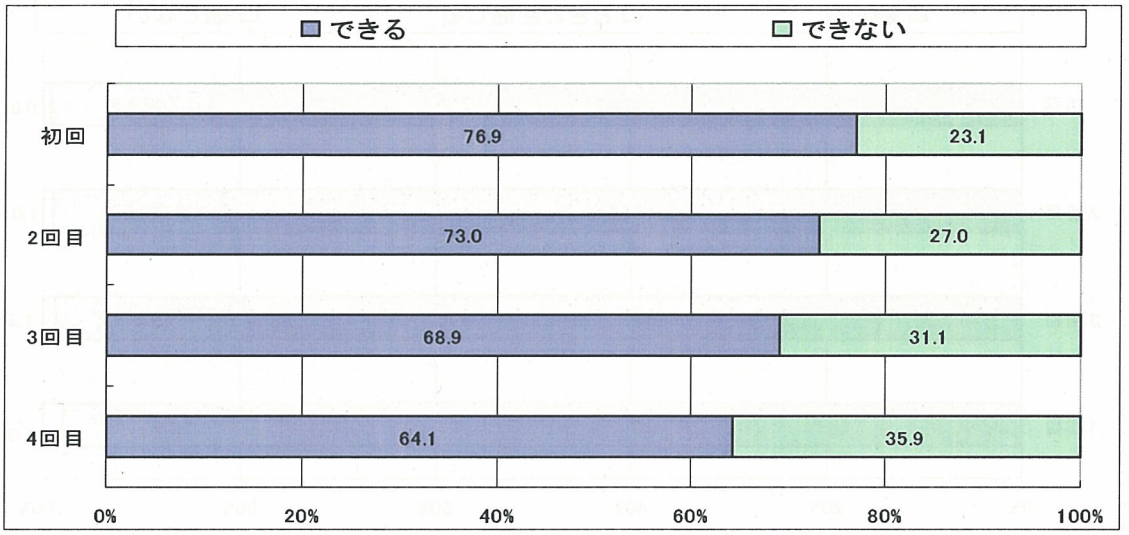
図 269・270　指示への反応（上：全体N=16,156,　下：予防有用型N=6,597）

(36) 毎日の日課を理解

予防有用型では、毎日の日課を理解については、初回は、「できる」が 6,171 名（93.5 %）で、「できない」が 426 名（6.5 %）であった。２回目は、「できる」が 6,110 名（92.6 %）

で、「できない」が487名（7.4 %）であった。3回目は、「できる」が6,031名（91.4 %）で、「できない」が566名（8.6 %）であった。4回目は、「できる」が5,958名（90.3%）で、「できない」が639名（9.7 %）であった。

全体の傾向と同様に予防有用型群についても初回から4回目にかけて「できない」の割合が増加していたが、その割合は、かなり低かった。



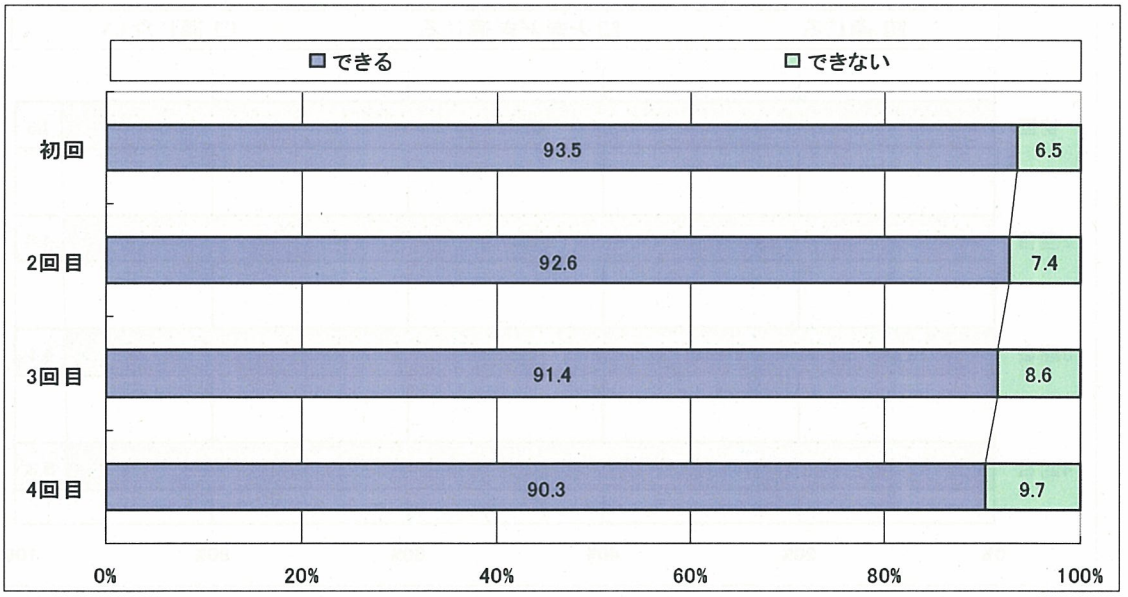
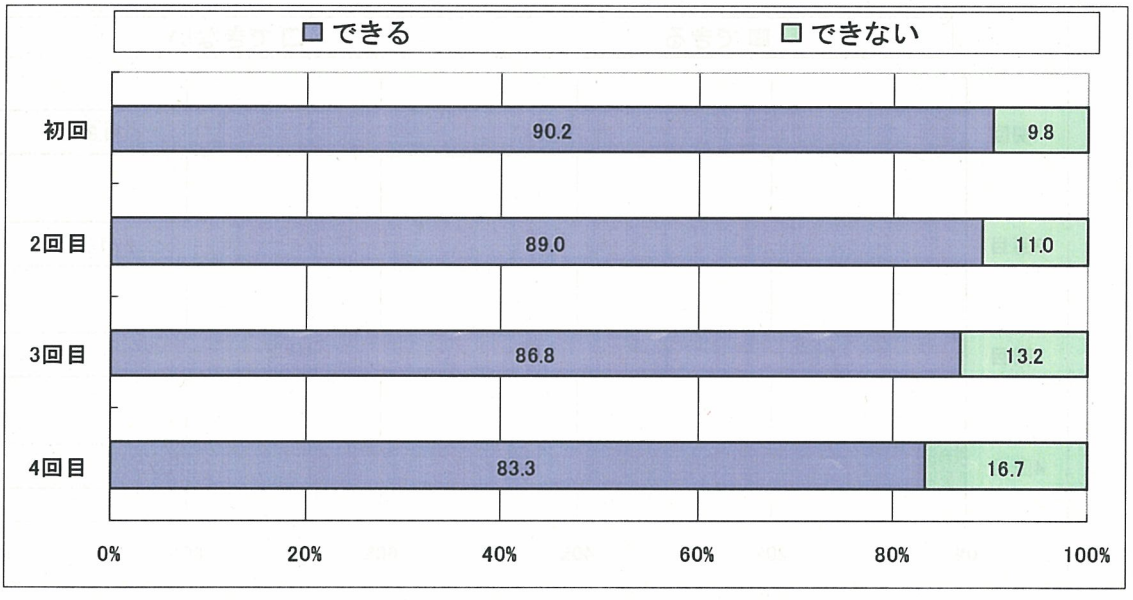


図 271・272　毎日の日課を理解（上：全体N＝16,156，下：予防有用型N＝6,597）

(37) 生年月日をいう

予防有用型では、生年月日をいうについては、初回は、「できる」が 6,480 名（98.2 %）で、「できない」が 117 名（1.8 %）であった。２回目は、「できる」が 6,477 名（98.2 %）で、「できない」が 120 名（1.8 %）であった。３回目は、「できる」が 6,473 名（98.1 %）で、「できない」が 124 名（1.9 %）であった。４回目は、「できる」が 6,460 名（97.9 %）で、「できない」が 137 名（2.1 %）であった。

全体の傾向と比較して、全体については初回から４回目にかけて「できない」の割合が増加するが、予防有用型群についてはあまり変化しなかった。



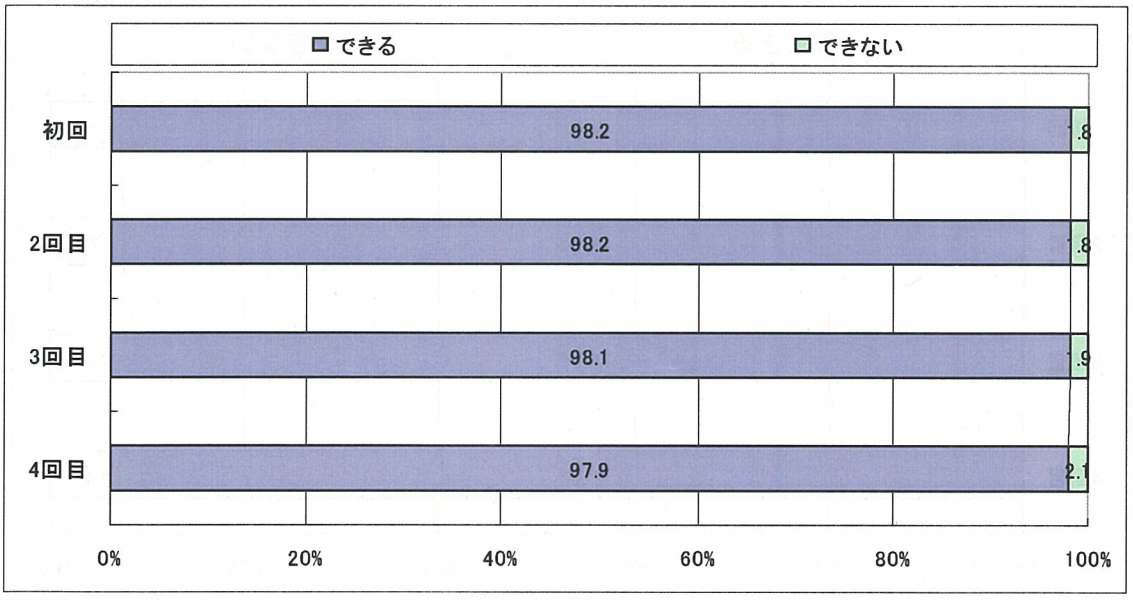
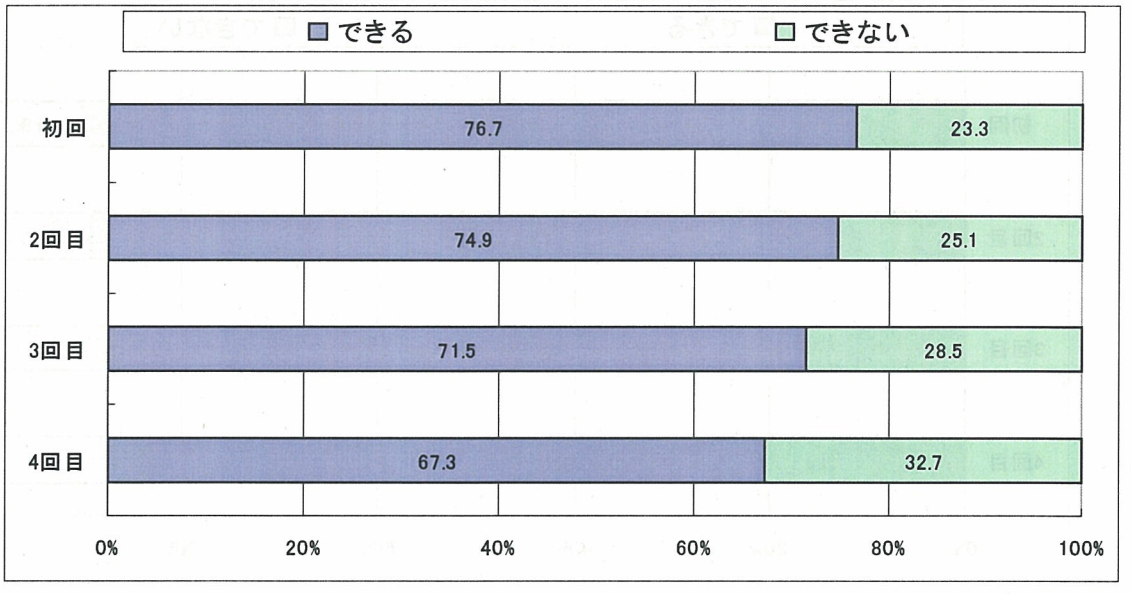


図 273・274　生年月日をいう（上：全体 N=16,156，下：予防有用型 N=6,597）

(38) 短期記憶

予防有用型では、短期記憶については、初回は、「できる」が 6,122 名（92.8 %）で、「できない」が 475 名（7.2 %）であった。2 回目は、「できる」が 6,105 名（92.5 %）で、「できない」が 492 名（7.5 %）であった。3 回目は、「できる」が 6,030 名（91.4 %）で、「できない」が 567 名（8.6 %）であった。4 回目は、「できる」が 5,975 名（90.6 %）で、「できない」が 622 名（9.4 %）であった。

全体の傾向と同様に予防有用型群についても初回から 4 回目にかけて「できない」の割合が増加していたが、その割合は、かなり低く、全体の 3 割程度であった。



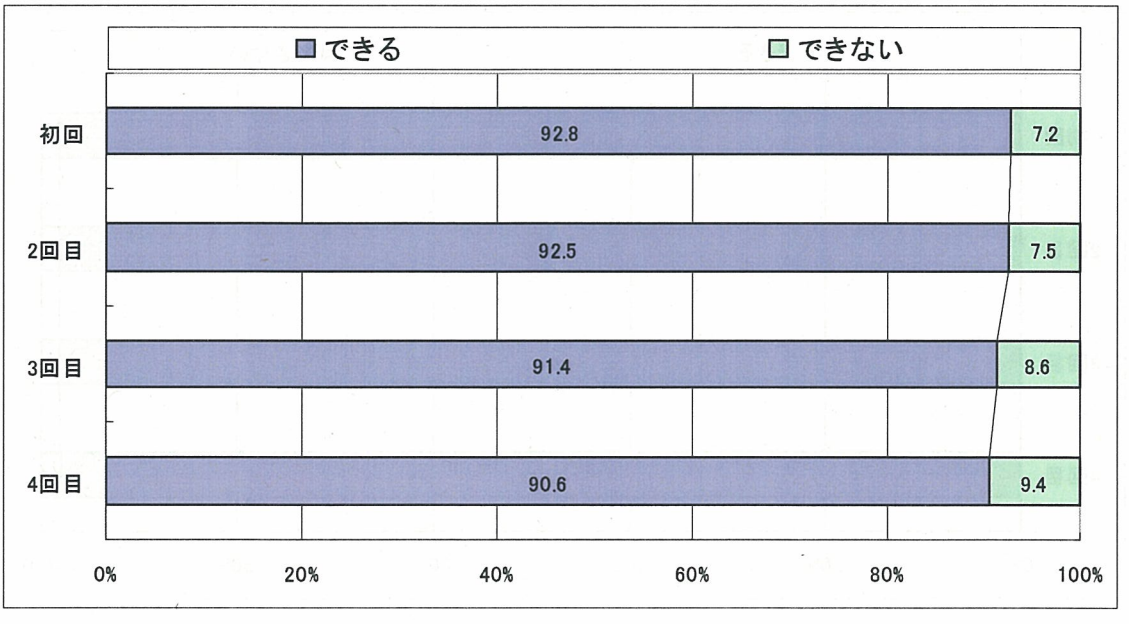
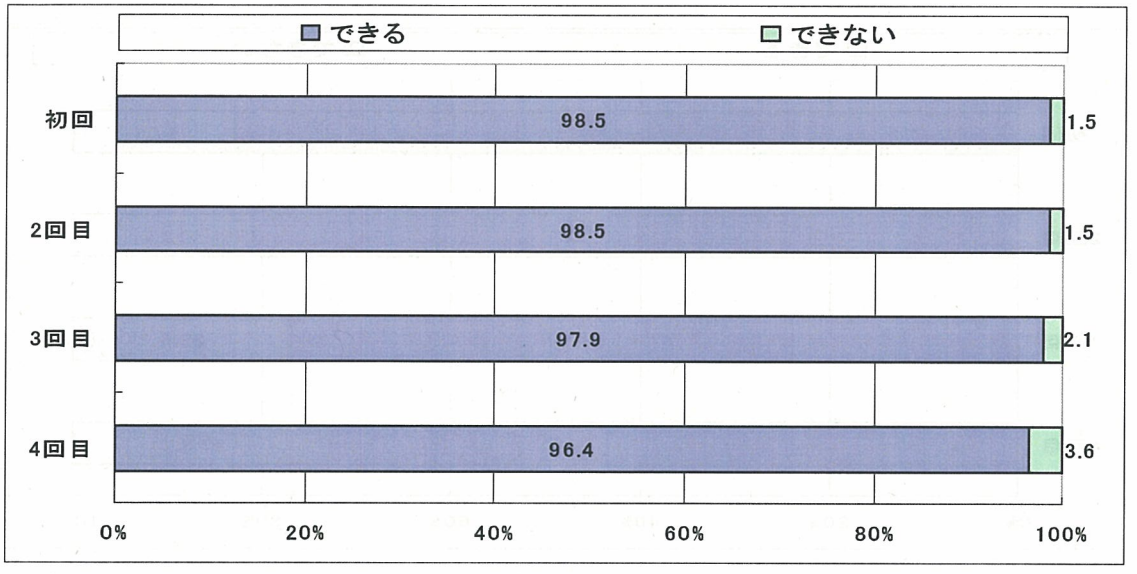


図 275・276　短期記憶（上：全体 N=16,156，下：予防有用型 N=6,597）

(39) 自分の名前をいう

予防有用型では、自分の名前をいうについて、初回は、「できる」が 6,590 名（99.9 %）で、「できない」が 7 名（0.1 %）であった。2 回目は、「できる」が 6,593 名（99.9 %）で、「できない」が 4 名（0.1 %）であった。3 回目は、「できる」が 6,590 名（99.9 %）で、「できない」が 7 名（0.1 %）であった。4 回目は、「できる」が 6,590 名（99.9 %）で、「できない」が 7 名（0.1 %）であった。

全体の傾向と比較して、全体については初回から 4 回目にかけて「できない」の割合が増加するが、予防有用型群については全く変化しておらず、99.9%が名前をいうことができた。



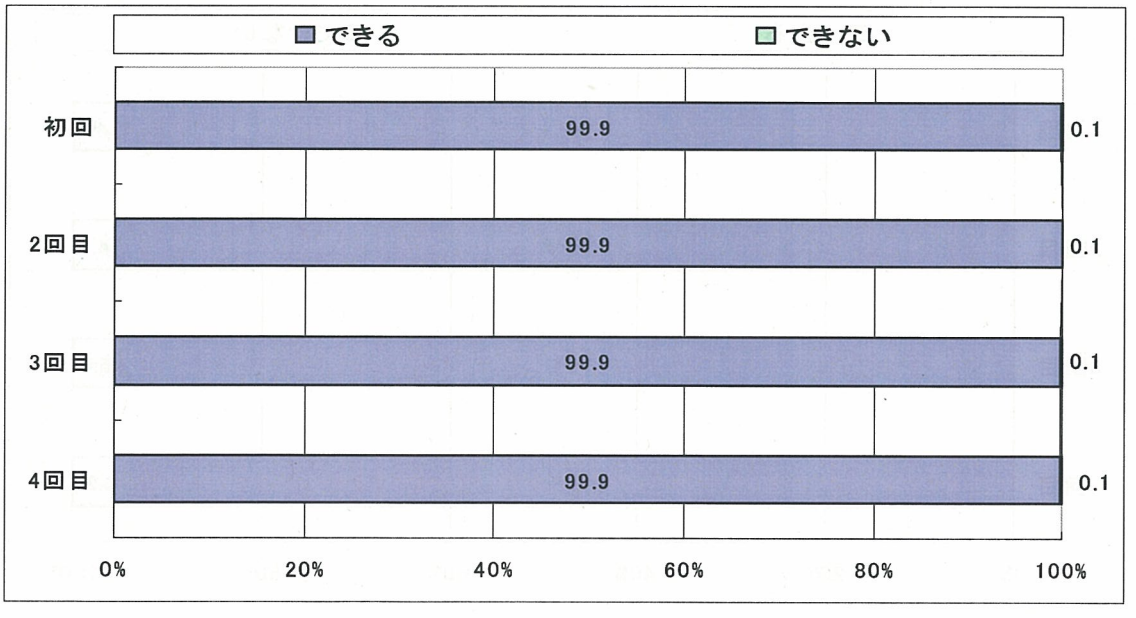
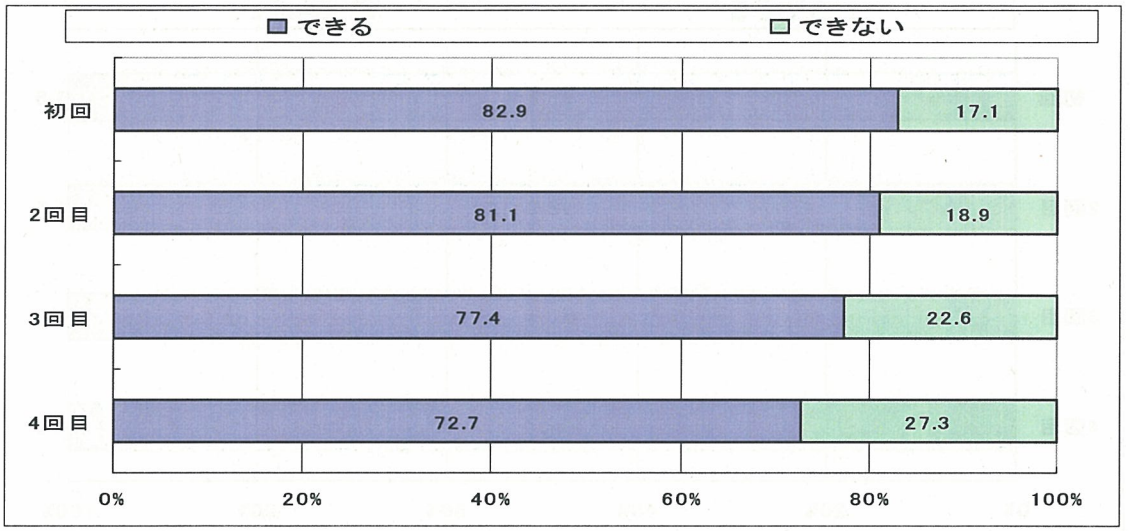


図 277・278　自分の名前をいう（上：全体N＝16,156，下：予防有用型N＝6,597）

(40) 今の季節を理解

予防有用型では、今の季節を理解については、初回は、「できる」が 6,319 名（95.8 %）で、「できない」が 278 名（4.2 %）であった。2 回目は、「できる」が 6,300 名（95.5 %）で、「できない」が 297 名（4.5 %）であった。3 回目は、「できる」が 6,270 名（95.0 %）で、「できない」が 327 名（5.0 %）であった。4 回目は、「できる」が 6,189 名（93.8 %）で、「できない」が 408 名（6.2 %）であった。

全体の傾向と比較して、予防有用型群についても初回から 4 回目にかけて「できない」の割合が増加していたが、全体の「できない」割合の 1/4 程度となっており、「できる」の割合は、平均すると 95%と示され、かなり高い値であった。



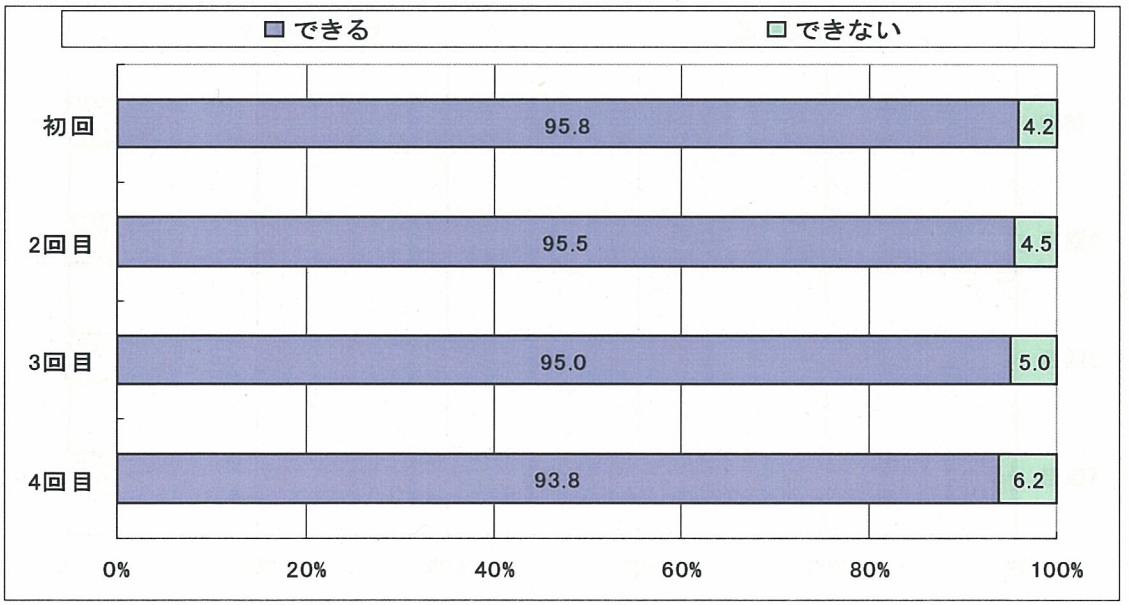
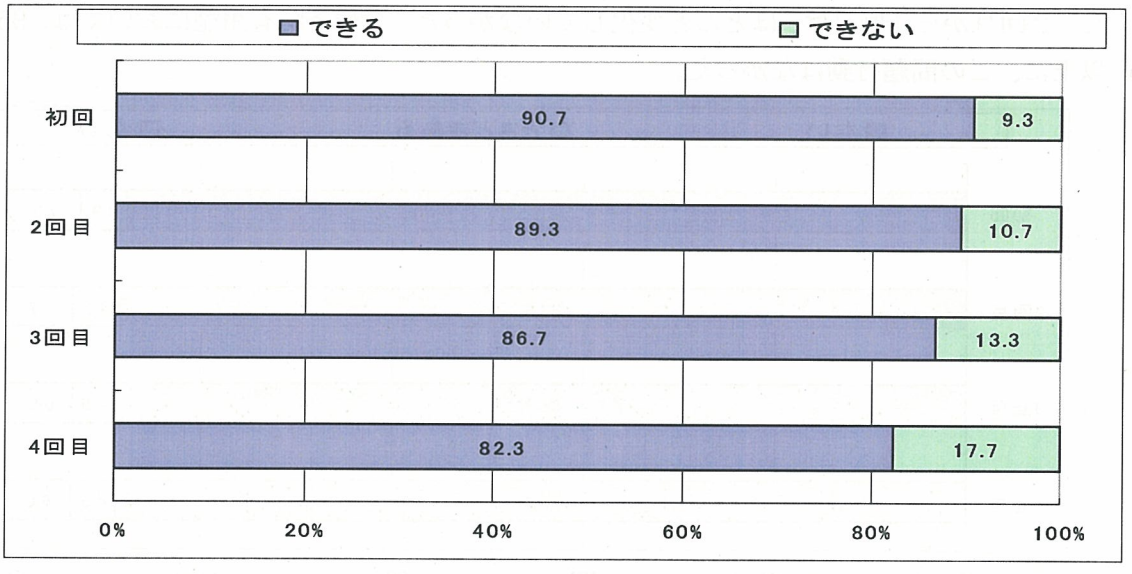


図 279・280　今の季節を理解（上：全体 N=16,156，下：予防有用型 N=6,597）

(41) 場所の理解

予防有用型では、場所の理解については、初回は、「できる」が 6,479 名（98.2 %）で、「できない」が 118 名（1.8 %）であった。2 回目は、「できる」が 6,499 名（98.5 %）で、「できない」が 98 名（1.5 %）であった。3 回目は、「できる」が 6,491 名（98.4 %）で、「できない」が 106 名（1.6 %）であった。4 回目は、「できる」が 6,475 名（98.2 %）で、「できない」が 122 名（1.8 %）であった。

全体の傾向と比較して、全体については初回から 4 回目にかけて「できない」の割合が増加するが、予防有用型群は、ほとんど変化しておらず、98%以上が初回から、4 回目まですべて「できる」であった。



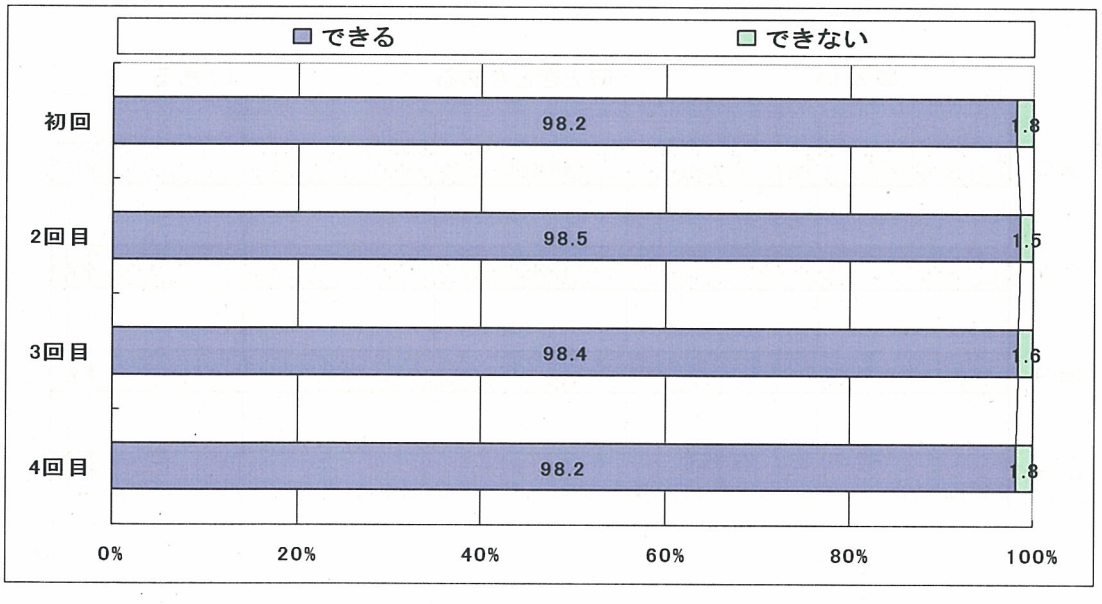
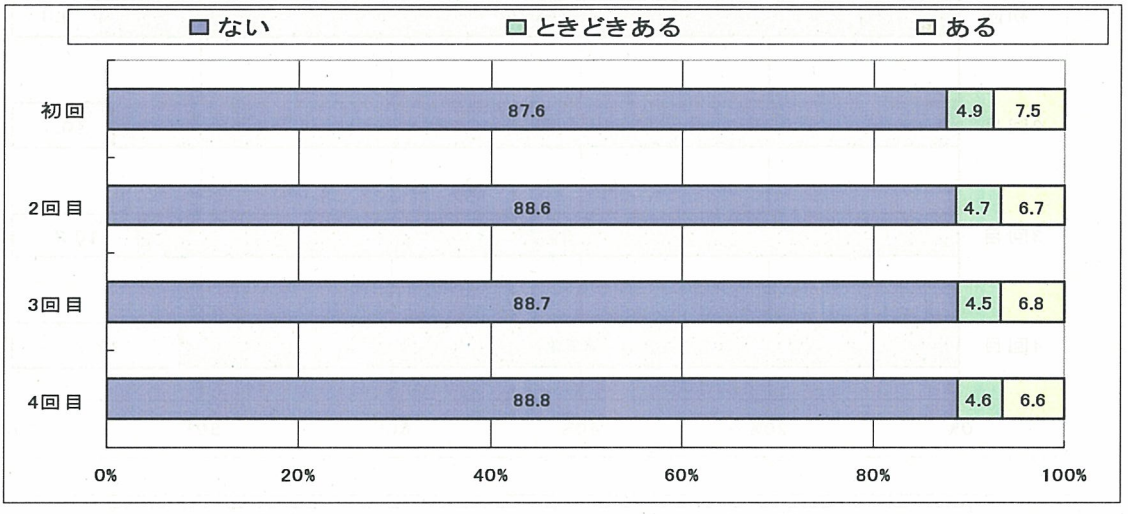


図 281・282　場所の理解（上：全体N＝16,156，下：予防有用型N＝6,597）

(42) 物を盗られたなどと被害的になることが（被害的）

予防有用型では、物を盗られたなどと被害的になることについては、初回は、「ない」が6,318名（95.8 %）で、「ときどきある」が128名（1.9 %）で、「ある」が151名（2.3 %）であった。2回目は、「ない」が6,341名（96.1 %）で、「ときどきある」が150名（2.3 %）で、「ある」が106名（1.6 %）であった。3回目は、「ない」が6,334名（96.0 %）で、「ときどきある」が144名（2.2 %）で、「ある」が119名（1.8 %）であった。4回目は、「ない」が6,313名（95.7 %）で、「ときどきある」が159名（2.4 %）で、「ある」が125名（1.9 %）であった。

全体も予防有用型群も初回から2回目に、「ときどきある」「ある」の割合が減少していた。2回目から4回目は、ほとんど変化していなかった。介護予防有用型においては、95%以上に、この問題行動はなかった。



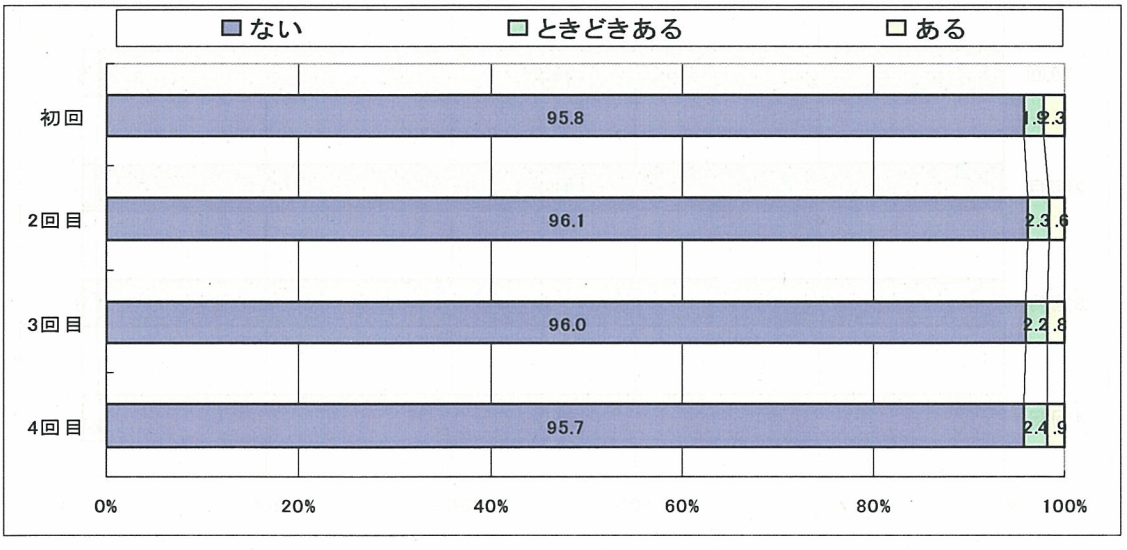
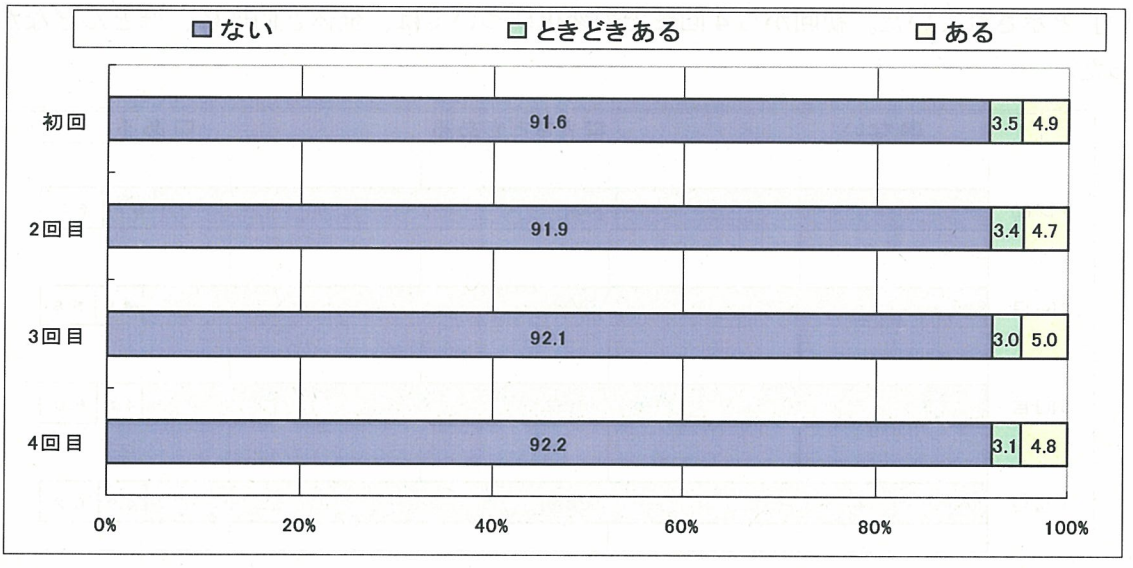


図 283・284　被害的（上：全体N=16,156, 下：予防有用型N=6,597）

(43) 作話をし周囲に言いふらすことが（作話）

予防有用型では、作話をし周囲に言いふらすことについて、初回は、「ない」が 6,462 名（98.0 %）で、「ときどきある」が 72 名（1.1 %）で、「ある」が 63 名（1.0 %）であった。２回目は、「ない」が 6,476 名（98.2 %）で、「ときどきある」が 75 名（1.1 %）で、「ある」が 46 名（0.7 %）であった。３回目は、「ない」が 6,481 名（98.2 %）で、「ときどきある」が 64 名（1.0 %）で、「ある」が 52 名（0.8 %）であった。４回目は、「ない」が 6,476 名（98.2 %）で、「ときどきある」が 72 名（1.1 %）で、「ある」が 49 名（0.7 %）であった。

全体の傾向と同様に予防有用型群は、初回から４回目まで、98%以上が「ない」と回答し、回数ごとの変化も２回目から４回目には全くなかった。



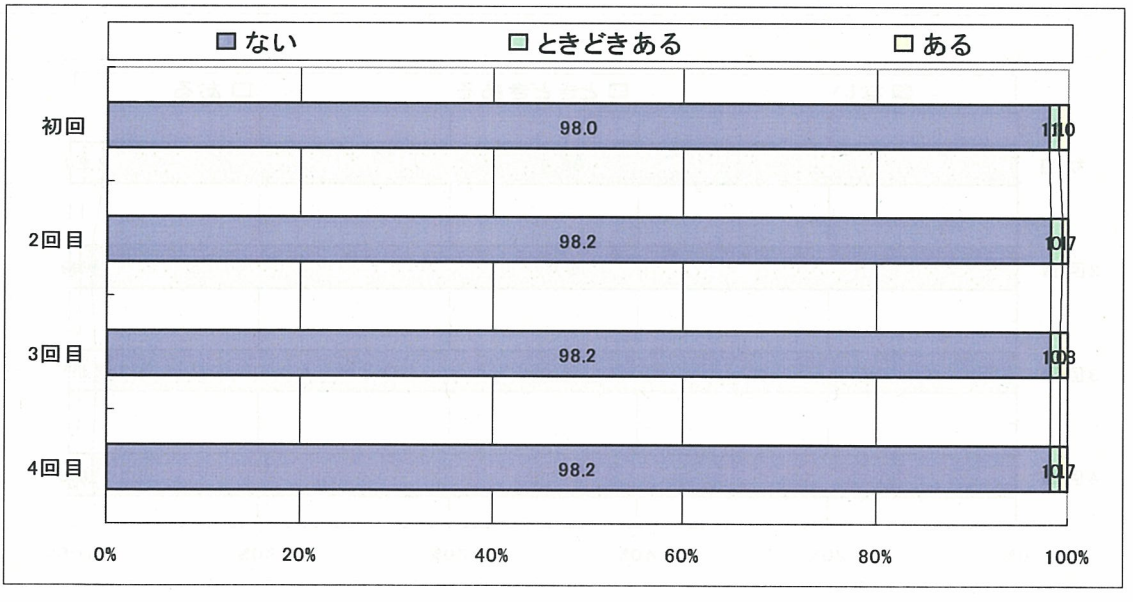
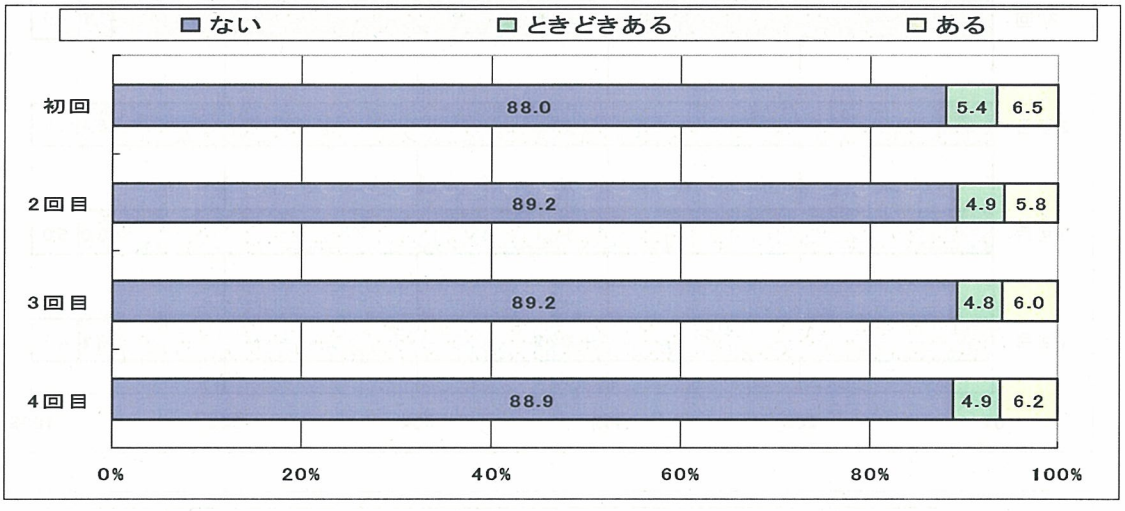


図 285・286　作話（上：全体N＝16,156，下：予防有用型N＝6,597）

(44) 実際にないものが見えたり、聞こえることが（幻視幻聴）

予防有用型では、実際にないものが見えたり、聞こえることについて、初回は、「ない」が6,361名（96.4 %）で、「ときどきある」が142名（2.2 %）で、「ある」が94名（1.4 %）であった。2回目は、「ない」が6,443名（97.7 %）で、「ときどきある」が93名（1.4 %）で、「ある」が61名（0.9 %）であった。3回目は、「ない」が6,427名（97.4 %）で、「ときどきある」が100名（1.5 %）で、「ある」が70名（1.1 %）であった。4回目は、「ない」が6,437名（97.6 %）で、「ときどきある」が102名（1.5 %）で、「ある」が58名（0.9 %）であった。

予防有用型群は全体よりも「ない」の割合が高く、初回から4回まで、96%以上に「ない」と示されていた。初回から4回までの変化については、全体と同様に、ほとんどなかった。



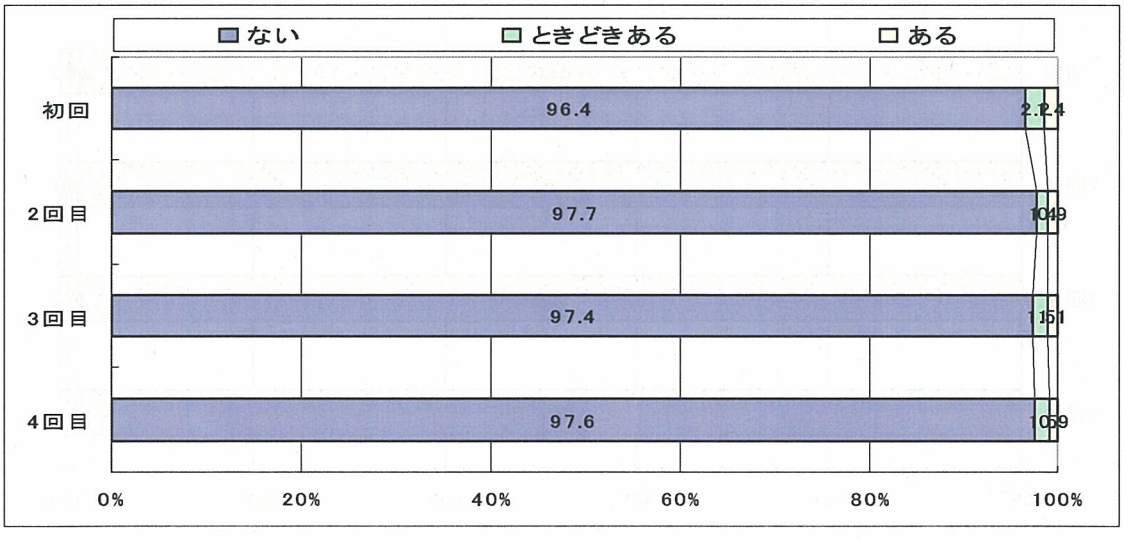
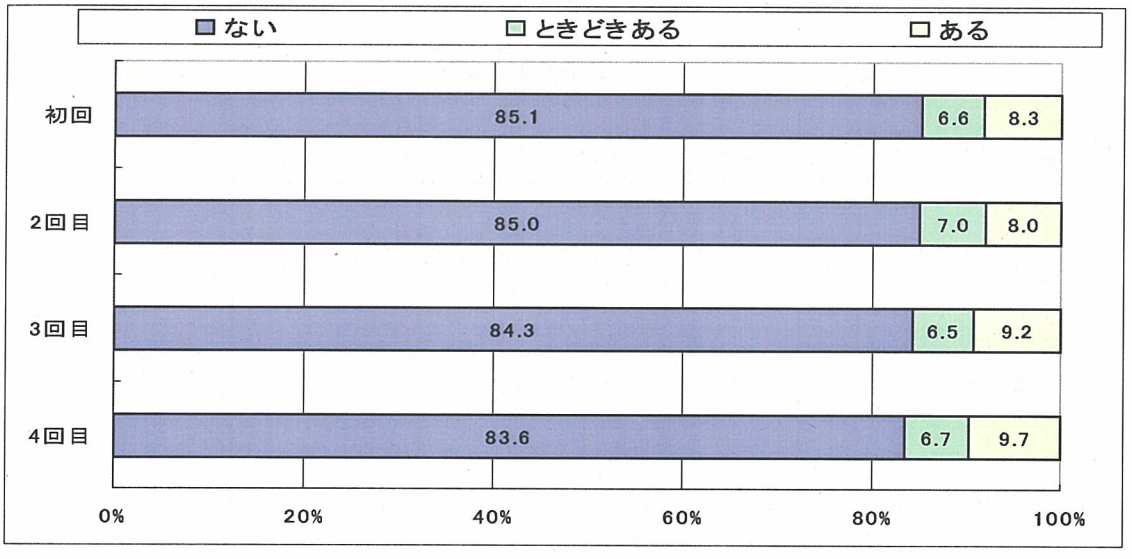


図 287・288　幻視幻聴（上：全体N=16,156，下：予防有用型N=6,597）

(45) 泣いたり、笑ったりして感情が不安定になることが（感情が不安定）

予防有用型では、泣いたり、笑ったりして感情が不安定になることについては、初回は、「ない」が 6,136 名（93.0 %）で、「ときどきある」が 260 名（3.9 %）で、「ある」が 201 名（3.0 %）であった。２回目は、「ない」が 6,154 名（93.3 %）で、「ときどきある」が 253 名（3.8 %）で、「ある」が 190 名（2.9 %）であった。３回目は、「ない」が 6,163 名（93.4 %）で、「ときどきある」が 235 名（3.6 %）で、「ある」が 199 名（3.0 %）であった。４回目は、「ない」が 6,167 名（93.5 %）で、「ときどきある」が 237 名（3.6 %）で、「ある」が 193 名（2.9 %）であった。

全体の傾向としては、初回から４回目にかけては、「ときどきある」「ある」の割合が増加するが、予防有用型群については、ほとんど変化がなかった。



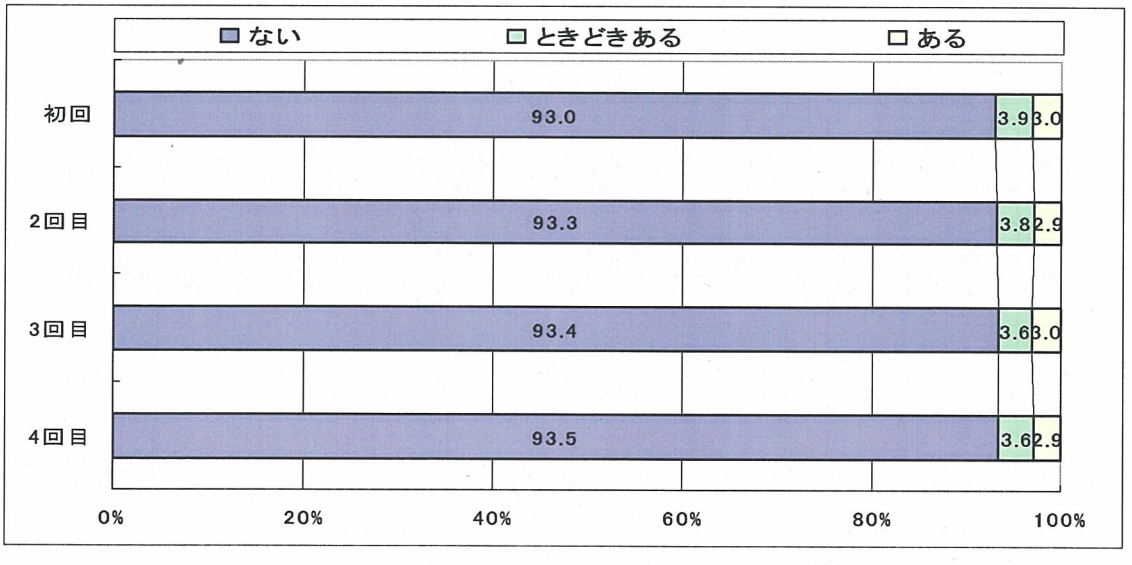
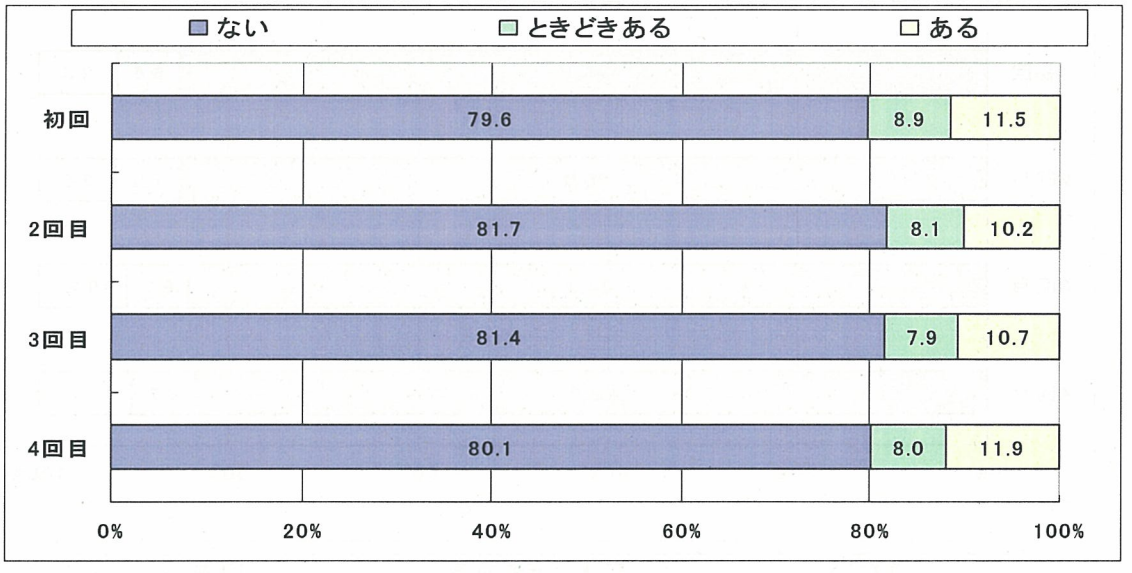


図 289・290　感情が不安定（上：全体 N＝16,156,　下：予防有用型 N＝6,597）

(46) 夜間不眠あるいは昼夜の逆転が（昼夜逆転）

予防有用型では、夜間不眠あるいは昼夜の逆転について、初回は、「ない」が 5,800 名（87.9 %）で、「ときどきある」が 411 名（6.2 %）で、「ある」が 386 名（5.9 %）であった。２回目は、「ない」が 5,982 名（90.7 %）で、「ときどきある」が 324 名（4.9 %）で、「ある」が 291 名（4.4 %）であった。３回目は、「ない」が 5,990 名（90.8 %）で、「ときどきある」が 318 名（4.8 %）で、「ある」が 289 名（4.4 %）であった。４回目は、「ない」が 6,006 名（91.0 %）で、「ときどきある」が 329 名（5.0 %）で、「ある」が 262 名（4.0 %）であった。

全体の傾向と比較すると予防有用型群は、２回目から４回目にかけての「ときどきある」「ある」の割合がほとんどなかった。また２回から４回目まで、昼夜逆転は、90%以上に発生していなかった。



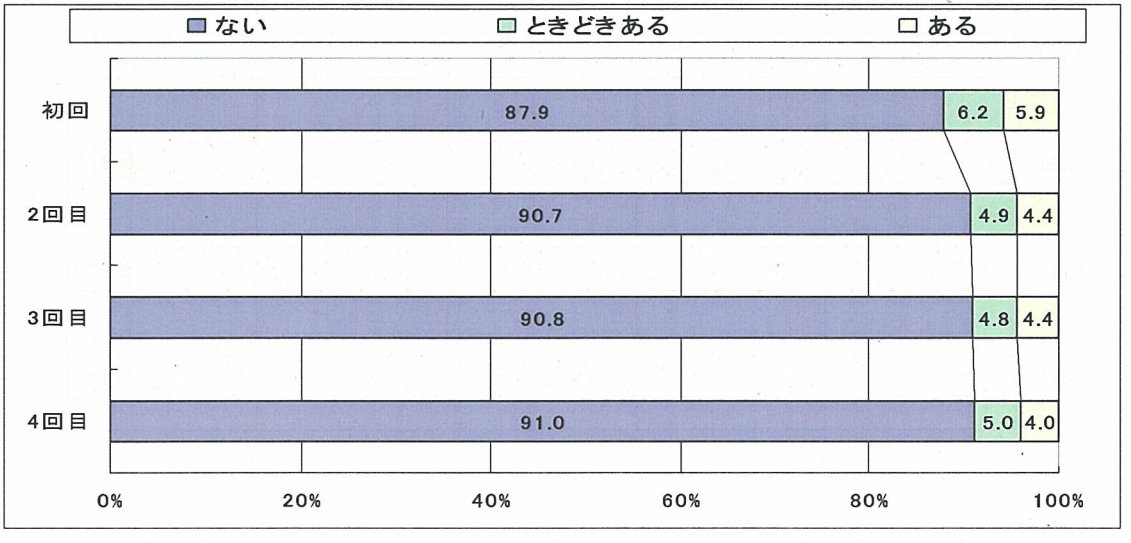
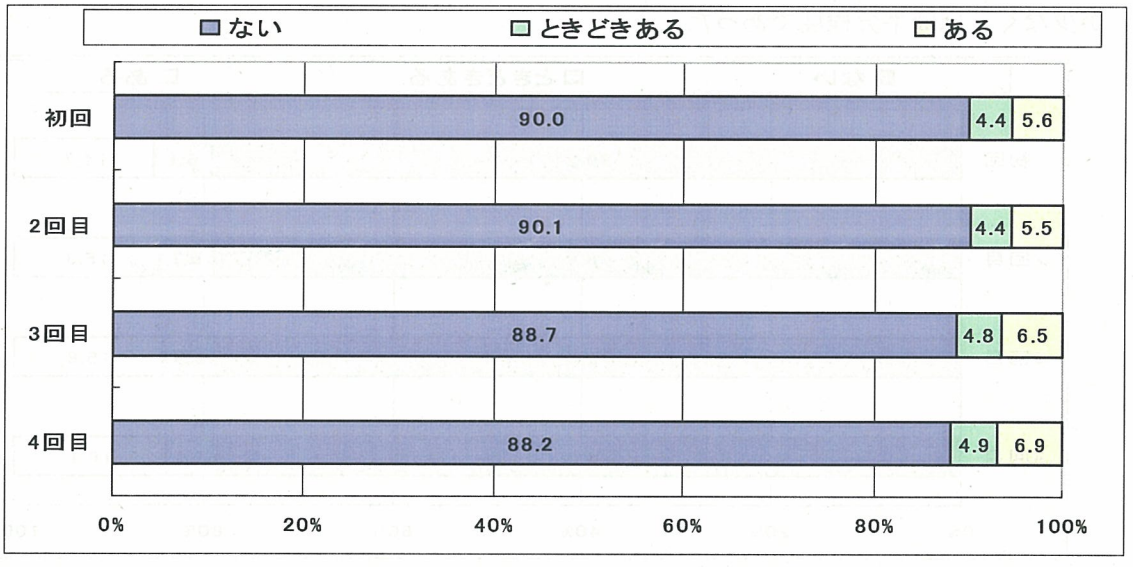


図 291・292　昼夜逆転（上：全体N＝16,156，下：予防有用型N＝6,597）

(47) 暴言暴行

予防有用型では、暴言や暴行について、初回は、「ない」が 6,450 名（97.8 %）で、「ときどきある」が 89 名（1.3 %）で、「ある」が 58 名（0.9 %）であった。2 回目は、「ない」が 6,481 名（98.2 %）で、「ときどきある」が 73 名（1.1 %）で、「ある」が 43 名（0.7 %）であった。3 回目は、「ない」が 6,462 名（98.0 %）で、「ときどきある」が 82 名（1.2 %）で、「ある」が 53 名（0.8 %）であった。4 回目は、「ない」が 6,459 名（97.9 %）で、「ときどきある」が 80 名（1.2 %）で、「ある」が 58 名（0.9 %）であった。

全体の傾向としては、認定回数が増えるにしたがって暴言暴行も増加していたが、予防有用型群においては、初回から 4 回目にかけて「ときどきある」「ある」の割合は、ほとんど変化しなかった。



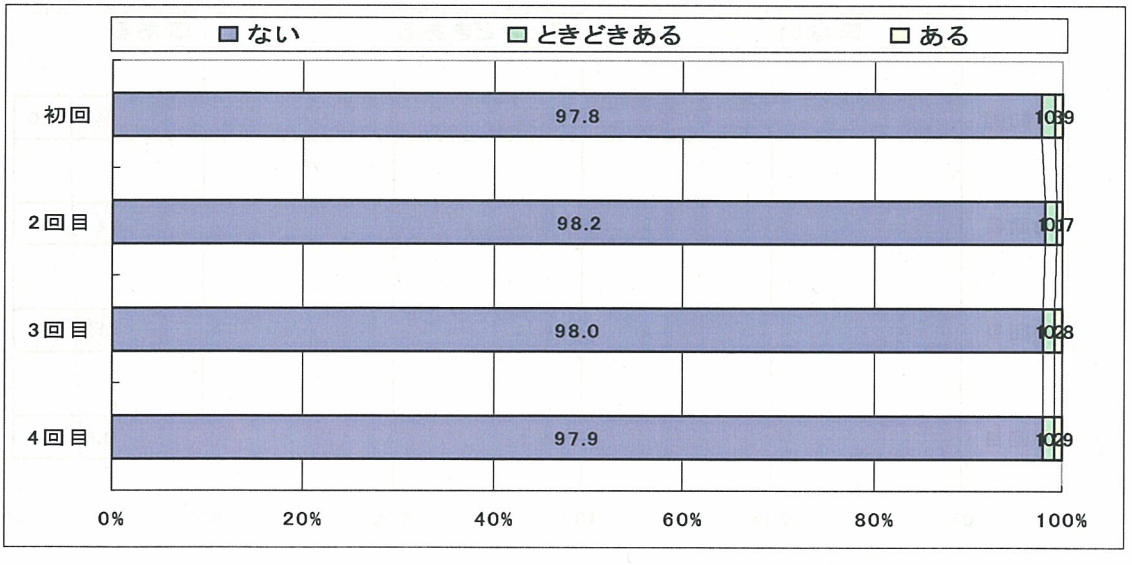


図 293・294　暴言暴行（上：全体 N=16,156，下：予防有用型 N=6,597）